



Ts

～ボクがホントウの気持ちに気付くまでの話～



ボクは母さんの顔を写真でしか知らない。

理由はボクが生まれてすぐに母さんは亡くなってしまったからだ。

でも幼少の頃のボクは寂しさなんて知らずに育った。そんなものを感じる暇がないくらい父さんがボクを愛してくれたから。

いつしかそんな父さんはボクの憧れになっていった。

父さんのような立派な大人になりたい。
その想いを胸に小さい頃から
ずっと努力をし続けた。

その結果。数年後にはボクは近所の人からも良
くできた息子さんだと言われる程になっ
ていった。

自分自身でもそう自信をもって言えるほどの
ことはしてきたつもりだし、これからも
父さんの息子として恥ずかしくないように
努力していくつもりだった。

そう、あんなことが起こるまではボクは本気で
そのつもりだったのだ。



眠りが浅くなって来ているのか、薄っすらと父さんのボクを起こしに来た声が聞こえる。

深く沈んでいた意識は何かにつ張り上げられるように浮上していく。

「おうい、晴。朝」飯できた…」

朝食を作り終え、息子を起こしに行くところには妻の面影がある少女が息子のベッドで寝ていた。

突然の状況に訳も分からず混乱しかけるがふと、いま世界でも問題になりかけている病気のことを思い出した。



TS病。

思春期の子供だけが掛かる性別が逆転してしまう謎の病気だが、まさか自分の子がこの病気に掛かるとは思ってもみなかった。

だが息子のベツトで寝ている妻によく似た少女を見れば疑うまでもなく一目瞭然だった。



「ふああ、もう朝か…。おはよう父さん
…って、どうしたのそんな驚いた顔して」

「どうしたのって…。晴、お前今の自分の状態に
気付いていないのか？」

「気付いていないって何に…」

「うおああ！何だこれ！」



「ない！ない！う、ああ…助けて父さん！」

自分の現状にようやく気付いた晴は慌てふためき泣き顔で助けを求めてくる。

その顔や仕草が亡くなった妻にそっくりで一瞬固まってしまうも、私はすぐに冷静さを取り戻し困惑している晴を宥め落ち着かせた。



突然の状況に混乱していた晴だが
一度落ち着くとむしろ興味深そうに
今の自分を観察している。

性別が変わったことによる拒絶感
はあまりないようで女になったこと
をそれほど気にしていないようだ。

とりあえず一息付けた状況に私はホッと
胸をなでおろす。



「うわぁ、我ながらすごい可愛いな。
自分じゃなかったら惚れてるところだよ」

「ああ、お前の母さん…美香の昔の姿に
そっくりで父さんも驚いたよ」

晴は鏡を見ながら自分の変わった顔を物珍し
そうに触る。その姿は本当に昔の妻のようで
つい見入ってしまう。



「そう言えば前から母さんにどことなく似てる
って言われてたっけ…」

「ボクは母さんの顔は覚えていないけど
やっぱり親子だから似たのかな？」

「元々女顔だったけど本当に女になったら
前よりそっくりなんだね」



「それにしても父さん、いつも冷静なのに今朝はすごい顔してたよ」

「ふふ、この顔だといつも寡黙な父さんが慌てふためく姿が見れて、なんだか新鮮で楽しいね」

無邪気に笑うその顔がより一層妻に似ていてつい顔を逸らしてしまう。



それから怒涛の如く色々あった。

会社も数日休み役所に手続きをしに行ったり
晴の学校に報告したりなど慌ただしさで
いっぱいだった。

だが幸いにも社会は私が思っていたよりも
この病気に理解があり周りの助けもあって
私たちは徐々に元の生活に戻っていったのだ。

性別が変わっても私に変わりない笑顔を向けて
くれる晴。だがどうしても私はその顔に亡き妻の
顔を重ね、意識してしまうのだ。

私はそんな情けない自分が嫌になり、
逃げるように酒を飲むようになっていった。

お酒に酔ってべろんべろんになった父さんが
上司らしきの人の肩を借りて帰ってきた

「悪いね、お父さんをこんなになるまで
付き合わせちゃって」

「いえ、そんなこと。
それより父を送り届けてくれて
ありがとうございます。」

ボクはそういうと、酔った父さんを受け取り
お礼を言って上司らしい人を見送った。



（うあ、すごいお酒の臭いがする。）

（……こんな風につぶれるまで酔った父さん
初めて見たな）

ボクはそんなことを考えながら、
酔った父さんを支えリビングまで運んだ。



「ううゝ美香あ。」

なんで一人で逝っちゃったんだよ」

父さんは僕にしな垂れかかりながら
謔言のように、ひたすら母さんの名前を呟く。

ボクの顔が母さんに似ているから寂しい
気持ちを思い出させちゃったのかもしれない。



いつもしっかりしている父さんからは想像も
できないほど弱々しい姿にボクは何かできる
ことをして上げたくなくなってしまっていた。

「……よっっー」

ボクは腹を決めると酔っている父さんの
頭を自分の膝の上に乗せた。



「…あつ。み、か？…美香なのか？」

「はいそうですよ。
もしかして忘れちゃいましたか？」

「…あ、あああつ！美香あ、美香あ！」

「はい、はい♪心配しなくても私はすぐそばに
いますよ」

んっ♡♡



ボクは少しでも父さんが安らげるようにと
母さんを装い膝上の頭を優しく撫でた。

たとえ嘘だとしてもあんなに辛そうな
父さんの顔を見ていたくなかったからだ。

ボクは父さんが泣き疲れて寝るまで
只々甘やかし続けた。

んっ♡♡



次の日の朝。父さんの顔はいつも以上に爽快なようすだった。

まあ、あれだけ泣き甘えたのだからすつきりしているのは当然だろう。

父さんは酔った時のことを少しだけ覚えていたように、夢で母さんに会えたと喜んでいた。



夢の中だけでも母さんに会いたいのかな
その日から父さんは家で飲むようになった。
ボクの方も酔った時に見せてくれた父さんの
嬉しそうな顔がなんだか可愛らしく思えて
しまい、母のふりをして甘えさせることが
続いてしまっていた。



父さんがお酒に酔ってはボクに甘えてくる。
そんな繰り返しの中、ボクにはどうしても
慣れないことがあった。

それは毎回、自己主張するかのよう
にズボンの中で膨らんでいるイチモツだった。



「うう、眠っているのに何でこんなに大きく
しているんだろう父さん」

気持ちよさそうに膝の上で眠っている
父さんをよそに、ボクはその硬く膨張した
股間に目を奪われてしまっていた。

んっ♡♡



「う、あ♡いま、ビクンって震えた。
父さんボクでこんなにしちやってるのかな？」

「…このままじゃ苦しいだろうし
何とかしてあげた方がいいよね？」

んんん♡



そんな言い訳めいた言葉を浮かべながら
ボクは熱くそそり立ったイチモツを
パンパンに膨らんだズボンから取り出した。

んんん♡

んんん♡



（お、おお…♡あつついのが手の中で
ビクンビクンって脈打ってる♡）

（何でだろう…自分以外のを触ってる
からなのかな？すごいドキドキしてきた）

はっ♡
はっ♡

はっ♡
はっ♡



拙い手つきでゆっくりと硬く熱い肉棒を
上下に擦り上げる。

扱いなれているはずのそれが、父さんのモノ
だというだけで妙に緊張してしまうのだ。

カウパーが指に絡み、クチャクチャと
いやらしい音を奏でる。

頬は熱を持ち呼吸も荒れてくるが
それでもボクは肉棒を擦るのを止めない。

はっ
はっ
♡

すっ
すっ



（あ……♡すごいビクビクしてきた。
もう出したいのかな？）

（……えい、えい♡出しちゃえ♡）

肉棒はひとときわ大きく跳ねると熱くドロドロ
とした精液を吐き出した。

あ……♡

びくっ
びくっ
びくっ



「ず」っ……こんなにいっぱい……♡」

ボクは無意識のうちに手に出された精液を
口に運んでいた。

「……美香」

「え、あっ……これは、そのっ！」

あ……♡

ん♡……♡



「大丈夫、分かっているよ。
美香は欲しがりやさんだもんな」

慌てるボクをよそに父さんは起き上がると
スカートの中に頭をつっこみ下着越しに
熱く湿った舌を這わせた。

んんん…♡

ちゅっ♡

れろ
れろ

あーん♡
♡



「あ、あぁっ♡そんなとこ舐めちゃっ♡
ひぁっ♡ん、んっ♡」

父さんに秘所を舐められているという
ありえない事態にも関わらず、ボクの女の子
の部分は愛液でトロトロに濡れてしまっていた。

んんん…♡

ちゅっ♡

れろ
れろ

あぁ♡
♡ん♡
♡♡





「んっ♡待って、お願いっ！
そんなにクチュクチュって舐められたら…っ♡」

「あっ♡あああっ♡ひゃうっ♡」

舌から与えられる未知の快感に自然と
口からは聞いたことのない女としての
艶声が漏れてしまっていた。

はっ♡
はっ♡

あ♡
あ♡
あ♡

(ダメっ♡ダメなのにつ♡父さんに大事なところ舐められてボク、感じちゃってる♡)

(あう♡気持ちいいの止まらないっ♡知らないっ♡ボクこんなの知らないよ…っ♡)

は↓っ♡
は↓っ♡

んっ♡♡



びちやびちやと溢れ出る愛液を舐める音と
ボクの淫らな声が部屋中に響く。

父さんにされているという背徳感も相まって
ボクの体はすぐに限界を迎えてしまう。

んんんんん

ぎゅ

ちゅぽ

あーん♡♡





あああ♡

は↓♡
は↓♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡
ちゅっ♡

「……っ♡もう、ダメっ♡
イクっ♡イっちゃう……♡」
波のように押し寄せる快楽に頭の奥が
チカチカと点滅し、あまりの気持ちよさに
体をブルリと震わせ達してしまった。

愛液を溢れさせトロトロに蕩けきった
ボクを抱え、父さんは自分の部屋に
連れ込んだ。

父さんはベットに寝かせたボクの秘所に
ガチガチにそそり立ったそれをあてがうと
濡れそぼった膣内を一突きで貫いた。





「んんっ♡う、はあっ♡ああっ♡」

痛みがないわけじゃない。

だがそれ以上に愛液で満ちた膣内は異物の挿入を喜び受け入れてしまっているのだ。

深く、深く侵入してくる肉棒の圧迫感と押し寄せてくる快楽に徐々に思考が流されてしまいそうになる。

おほ♡
おほ♡

あゝ♡

んんっ♡

「ひあっ♡あ、ああっ♡入って♡
入ってきちゃってるう♡」

「やあ♡そんなに激しくっ♡
あ、あう♡中ずぷずぷされて…っ♡」

あはは♡
あはは♡

（ああっ♡ボク初めてなのにつ♡
父さんに抱かれて気持ちよくなっ
てきちゃってるう♡）





「美香はここが好きだもんな」

「ひゃうっ♥♥な、何これっ♥♥
は、ああっ♥♥こんな、の…っ♥♥お、おおっ♥♥」

しゅっ♥♥
しゅっ♥♥

ん

は
は
は

父さんは円を描くように腰を動かし膣内を肉棒で弄り倒す。

まるでこちらの弱いところを知り尽くしたかのような父さんの動きに翻弄され、なすが儘にされてしまう。





「あっ♡ああっ♡そんなに深くまでいっばいに
されたら、もう戻らなくなっちゃうっ♡」
男の時では味わえなかった女の深い快樂に
ボクは身も心も淫れてしまう。

「っ！美香、もう出すぞ！」

「あ、待って！中はっ、中はダメっ！
ダメだよ！」

ボクの懇願もむなしく父さんは亀頭で子宮を
押し潰すようにしながら奥めがけて射精した。

あゝ♡

あゝ♡

はっ♡
はっ♡

いっ♡
いっ♡



「はあ♡はあ♡…ダメって言ったのにこんなに奥にいっぱい♡」

父さんは出し尽くした後、ボクの上に覆いかぶさるように倒れこみそのまま寝てしまった。
「…もう、好き放題したのに自分だけさっさと寝ちゃうなんてズルいよ父さん」



一線を越えてしまったあの日からボク達の関係は少しだけ変わった。

ボクがお酌をし、父さんが酔うほど飲む。それが抱かれる合図になっていったのだ。

ただ、父さんはボクと母さんを間違えるほど酔わないと手を出してこない。

もしかしたら薄々と本当のことに感づいているからなのかもしれない。

それでもボク達はその事を話題にも出さずにこの関係が続けた。ボクは母さんのふりをしながら父さんと何度も愛し合ったのだ。



…けど最近はお母さんの面影を求めてくる
父さんの姿に胸の奥がチクリと痛むようにな
ってきていた。

最初の頃は父さんが少しでも安らいでくれる
なら、それだけでよかったはずなのに…。

ボクはいつの間にかお母さんではなく自分を
見て欲しいと思ってしまっているのだろうか？





「ボクは母さんじゃないんだよ、父さん……」

最近クラスの男子に学園でよく告白される
ようになって来ていた。

女友達が言うには仕草や表情が女の子らしく
なって来ているから、今までとのギャップに
やられてしまうらしい。



「……って言う」ことがあつてさ。
でも正直そんなこと言われても
嬉しくもなんともないんだよね」

「父さんはどう思う？
やっぱりボク変わって
来ちゃってるかな？」

「ああ、最近ずいぶん女の子
らしくなって、より可愛くなってるよ」



恥ずかしくなってしまうような言葉を
なんの躊躇もなく言う父さんに、心臓が
ドキドキと高鳴り恥ずかしさで顔を
まともに見れなくなってしまうた。



（な、なんでだ！女の子扱いなんて学園で
散々されたし、性別が変わってから可愛い
なんて飽きるほど言われたはずなのに……）

（それが父さんからの言葉だっと思うだけで
頬が火照ってしまうくらい嬉しいっ）

初めて父さんから女の子として褒められた
ことに想像以上に舞い上がってしまう。



（……ああ、そうか。なんでこんなに嬉しいのかようやく分かった）

（母さんの代わりとしてじゃなくて、きちんとボクだけを見て言ってくれた言葉だからなんだ）

（ボクは女の子としての自分を父さんに見て欲しかったんだ♡）



ようやく自分の本当の気持ちに気付いボクは
このおかしな関係を壊すことに決めたのだった。

「はは、いつもお酌してくれてありがとな晴」

上機嫌そうに僕の注いだお酒を飲む父さん。
だけど今日はいつもと違う。ボクは意を決して
決定的な言葉を切り出した。



「うん、いつもボクがしているんだよ。
…ねえ、父さんも気付いているんでしょ？
あれは夢なんかじゃなくてボクなんだって」

もう止められない。

最悪ボク達の関係は修復できないくらい
壊れてしまいかもしれない。

それでも僕は踏み込んだ。
自分の気持ちを押さえつけるなんて
もう出来そうになかったからだ。



「……そうか」

そう言々と父さんは予想通りというか特に慌てることもなくボクの言葉を待つように見つめてくる。

緊張で喉はカラカラになり心臓はバクバクと速くなる。それでもボクはなんとか言葉を吐き出した。



「最初はただ父さんの役に少しでもなりたかった
だけだったんだ」

「でもボクの中の女の子の部分がどんどん
父さんのことではいっぱいになって…」

「父さんがボクを抱きながら母さんの名前を
呼ぶと胸が苦しくなる。好きって想いが家族
の『それ』から異性としての気持ちに変わって
いたんだ」



「あは、ごめんね。元男がこんなこと言っても
気持ち悪いだけなのに……」

「でも……でも、もし父さんが受け入れて
くれるんだったらボクは……っ」



「もう、それ以上言わなくていいんだ。
……」めんな父さんの為に苦しい思い
をさせちゃって」

「父さんが弱かったからお前に母さんの
ことを重ねてあんなことまでして……」

「お前は母さんの代わりなんかじゃないのにな」

「……父さん」



「お前の言った通り本当は気付いていたんだ」

「最初は止めないといけないうって思っていた。
けど段々お前のことを女として見てしまってた…」

「最近ばただ母さんを言い訳にしてお前を
抱いていたんだ。…はは、父親失格だな」



「ち、ちがっ！ボクだって父さんのこと…っ！」

「…いいんだな？お前を女として扱って。
一度そうしたら父さんはもう止められないぞ」

「…あ♡」

あ♡♡♡♡♡



父さんの真剣な顔がボクを射抜く。
その瞳には母さんではなくボクが
映されていた。

んっ♡♡

「うん♡ボクを女の子にして下さい♡」



「ちゅっ…あむ…ちゅる、れる♡
あ…っ♡とっ、さん♡んっ♡ちゅぶ♡ちゅ♡」

近づけられる父さんの唇。
ボクはそれを拒むことなく受け入れた。

お互いの舌を絡め体液を交換する。まるで
恋人同のようなキスをボク達は楽しんだ。



「れろっ♡あむ…ちゅ、ちゅぷ♡
じゅぷ…んく♡父さんの涎おいしい♡
もっど、もっどちようだい♡」

「ちゅぷ♡じゅぷ…じゅる♡
じゅるる♡…ちゅ♡ちゅぱ♡」

フ…フ…♡

父さんの涎を流し込まれるだけで体は火照り
秘所からは愛液を溢れさせてしまう。

れろ
れろ

「もうすっかりと準備は出来ているみたいだな」

「あ……♡」

父さんは愛液で濡れた下着をずらし
割れ目に亀頭を押し当てると、
その熱くそそり立つ肉棒を挿入した。

んんん……♡

あ……♡

は……♡
は……♡





「んっ♡あぁっ♡ガチガチちんぽで膣内
ぬぶぬぶ擦られて…っ♡」

「ひゃうっ♡ボクの、なかぁ♡父さんの
おちんぽで広げられてるう♡」

じゅぽっ♡
じゅぽっ♡

すぽっ♡
すぽっ♡

あん♡
あん♡

は♡
は♡

ずぶずぶと膣肉を掻き分けるように侵入
してくる肉棒。慣れて来たはずのそれに
いつも以上に反応してしまう。

あま
あま

んあ

は
は



「ああ♡これダメっ♡おかしくなるっ♡
あんっ♡んっ♡はあ♡奥にゴリゴリって
当たって…っ♡」

「んっ♡そんな深い所、ぐりぐりされたら
頭の中、真っ白になっちゃっ♡父さん
ボク、イっちゃっ♡うよお♡」

お母さん♡
お母さん♡

ああ♡
ああ♡
ああ♡

はっ♡
はっ♡
はっ♡



「晴っ！晴っ！」

「んっ♡あ、あ♡どう、さん…っ♡」

母さんではなくボクを必死に
求めてくれる父さん。

その姿に幸せと嬉しさで心が満たされ
軽くイってしまう。

お母さん♡
お母さん♡

あ♡
あ♡
あ♡

は♡
は♡
は♡



「うあっ♡か、体が勝手に……♡
ひうっ♡あああっ♡イクっ♡イツちゃう♡」

「……っ！締め付けが強くっ！……出すぞ、晴っ！」

「うん、きてえ♡ボクの中に父さんの頂戴っ♡」

おまんこ♡
おまんこ♡

あん♡

は♡
は♡
は♡



「ん、んんっ♡きてるっ♡子宮の奥に
どろどろのザーメン出されちゃってるっ♡」

「んっ♡はあ♡はあ♡あ、ああっ♡
内側から父さんに染められちゃってるっ♡」

しゅっ♡
しゅっ♡
しゅっ♡

あ♡
あ♡
あ♡

は♡
は♡
は♡



「すっ…っ…っ…♡父さんの精液でボクの中
こんなにいっぱいになっちゃった♡」

ボクはわざとらしく見せつけるように
割れ目を広げて見せた。

膣穴からは大量の精液がゴポリと溢れる。



父さんはそんなボクの姿にごくりと生唾を
飲み込むと精液の溢れ出る秘所を食い入る
ように見つめる。

あ……♡

は……♡
は……♡

「……ふふ♡父さんのおちんぽ
まだガチガチのままだね」

「明日はお休みだしこのまま
またしちゃおっか♡」



ボク達は枷の外れた獣のようにお互いを求め、一日中まぐわりあっていた。

肌と肌を密着させ蕩け混ざり合うように腰を動かす。

父さんのおっきな体に抱かれていると安心感と嬉しさで全てを任せたくなってしまう。

んっ♡

いゅぽ♡
いゅぽ♡



「あっ♡あうっ♡だ、だめっ♡そんなふう
にしたらボク…っ♡」

「ひやあ♡あ、あ♡好きにっ♡
もっと好きになっちゃうよ♡」

「父さんのこと男の人として
愛しちゃうのお♡」

は
は
は

い
い
い

あ
あ
あ



「…何だそんなことか」

「いいじゃないか、それならそれで。」

父さんは晴のこと女としても娘としても
とつくに愛してるぞ」

耳元でそう呟く父さんの言葉に嬉しさの
あまり体は震え、親子で愛し合っている
という背徳感にゾクゾクとしたものが
背筋を走った。

は
は
は

あ
あ
あ

い
い
い



「ボクたち親子なんだよ？いいのそんなこと言って。ボクもう本気にしちゃうよ♡」

「当たり前前だ。それに本気にして
くれないと困るぞ。私はお前を
手放す気なんてないんだからな」

「っ♡父さん…っ♡」

は ↓
は ↓



その言葉が引き金になってボクの体は
ブルリと震え激しくイってしまう。

ガクガクと痙攣しながら父さんにしがみ付き
体全体でその存在感を求めてしまう。

女になってから様々なものが変わって
しまったが、初めて心の底からこうなった
ことに喜びを覚えた。



んっ♡

はっ♡
はっ♡

いっ♡
いっ♡



「来てえ、父さん♡ボクが残っている男の子の部分消して、父さんだけの女の子にして♡」

「父さんの濃厚ザーメン、ボクの赤ちゃんの部屋に沢山出してえ♡」

「っ！」

びゅぶるるるっ！

は ↓
は ↓

(Hand-drawn pink scribbles)



「ひああっ♡あつついの中に……♡
ひうつ♡オマンコ気持ちよくて
キュンキュンって喜んじゃってる♡」

大きく突き入れられると同時に勢いよく
射精された精液は子宮内でビチャビチャ
と広がる。

その波は雌の快楽を体に馴染ませるように
染みわたっていった。



「ちゅ♡ちゅる♡…ふふ♡父さんのおちんぽ
熱くて舌が火傷しちゃいそう♡」

「んっ♡ちゅ…ちゅぶっ♡れる、ちゅ
ちゅぶ♡ちゅる♡」

んっ♡♡

っ♡♡♡

引き寄せられるように、むせ返るような
雄の臭いをさせる肉棒に舌を這わせてしまう



「あは♡舌の上でビクビク脈打ってる♡
ボクのお口そんなに気持ちいいんだ♡
じゃあ、もっとすゝいのして上げるね♡」

「ぢゅぶっ♡ちゅ…じゅる♡れる♡ちゅ♡
れるお♡んっ、ちゅぶ♡じゅる、じゅるる♡」

んっ♡♡

フー♡♡♡

あゝ♡
ちゅ♡



ボクは父さんにもっと喜んで欲しくなり
深く咥え口全体を使って扱き上げる。

舌で裏筋を刺激しながら唾液を絡ませ
じゅぼじゅぼといやらしい音を響かせる。

んんん

うーっ♡♡

まるで発情した雌のような顔を晒しながら
ちんぽを咥えるボクの姿にはもはや元の
面影など何処にもなかっただろう。



「う、あ、ああ！晴、もうっ！」

「んっ！んっ！んく…んぐん…」くっ♡」

んんん！

んんん！
んんん！

肉棒は口内で大きく跳ねると喉の奥に叩き付けるように濃厚な精液を射精した。

口いっぱいに出された父さんの味と臭いにボクまでイってしまふ。



「ひあっ♡いいっ♡父さんのおちんぽ
気持ちいとグリグリ当たって…っ♡」

「あ、あああ♡気持ちよくて腰止まらないよお♡」

父さんの上で快楽を貪るように腰を振る。
肌がパンパンとぶつかる音と淫らな喘ぎ声
が部屋に響く。

んっ♡
はっ♡
はっ♡



「晴は本当にエッチな女の子になっちゃったな」

「うんっ♡そうなの♡父さんとのエッチに
ハマっちゃって、心も体も全部父さん専用の
女の子に変えられちゃったのっ♡」

はぁ

はっ♡
はっ♡

たっ♡
たっ♡

いっ♡
いっ♡

いっ♡
いっ♡



「ほら、父さんの愛情たっぷりも孕ませミルク
子宮の奥に沢山出してあげるぞ♥」

「うん、頂戴♥精液欲しいって疼いちゃってる子宮に父さんの孕ませミルクでいっぱいにしてボクを妊娠させてえ♥」



びゅぶ、びゅるるっ！

「あ、あああっ♡イク…っ♡やっぱりこれ
すごいのお♡ひうっ♡奥でビュルビュル
って出てっ♡あ、あ♡また、イっちゃう♡」

ああ♡

んあ

んあ

あ♡

んあ♡



「んひいっ♡はあっ…ああ♡おく、深いとこ
抉られて、あああっ♡ボクの中、もう父さん
だけの形になっちゃってる♡」

「んっ♡ああっ♡父さん、好き♡
もっと、もっと♡ボクに父さんを刻んで♡」

おっぱい
すぽろ



あーん♡
♡♡♡

は
っ♡
っ♡
っ♡



사랑해요

は ↓ ↓
は ↓ ↓

「っ！出すぞっ！晴っ！私だけの娘マンコに
種付けするからな！」

「うん、来てえ♡中に…っ♡子宮の奥に出して♡
ボクの赤ちゃんのお部屋に父さんの精液で
マーキングして孕ませてえ♡」



じゅわん♡
じゅわん♡
じゅわん♡

ん♡♡♡

は♡
は♡
は♡



びゅぶるるっ！

「お、おおっ♡い、イってるう♡精液奥に
ドプドプだされて、イっちゃってるう♡」

びゅぶるるっ

あ♡
あ♡
あ♡

びゅぶるるっ

は♡
は♡
は♡



（あ、あっ♡精子がびちびち泳いで、卵子
犯してるっ♡ひうつ♡ボク父さんの
赤ちゃん孕んじやったあ♡）

完全に父さんのモノになった幸せと嬉しさに
包まれながら体をビクビクと痙攣させ何度も
イってしまう。

♡♡♡
♡♡♡
♡♡♡

んあ

♡♡♡

♡♡♡
♡♡♡
♡♡♡



「ふふ♥出すだけ出したら疲れて
眠っちゃうなんてなんだか子供
みたいだな♥」

隣で安らかな顔で眠る父さんの頬を
そっと撫であげる。

…まるで夢のような時間だ。○

ボクはずっと昔から
これを望んでいた気さえする。

んっ♡



いや実際に望んでいたのだろう。

ただTSする前のボクは男だったから
無意識に自分から気付かないように
していただけで…。

でも違ったんだ。

女にならなければ気付けなかったで
あろう本当の気持ち。

そう、ボクは父さんをに恋をしていたのだ。



そうでなければ女になったからって、実の父親に抱かれないなんて思うはずもない。

そんなことを考えながら父さんの顔を見ていたら、なんだかボクまで眠たくなってきた。

瞼が重くなりボクの意識は何かと呼ばれるように落ちていく。

ああ…どうかこの夢のような時間から目覚めませんように。





















































































































































































